



日本聖公会 北関東教区時報

発行所 日本聖公会 北関東教区文書部
〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町2-172 電話 048-642-2680

祝 イースター

ヤコブの夢

「わたしはあなたと共にいる」

主教 ゼルバベル 広田 勝一

旧約聖書の創世記にヤコブという人物が登場します。イスラエル十二部族の祖とされる息子たちの親であるヤコブです。ヤコブはまだ若者であった時、兄エサウが受けるべき父イサクの祝福を奪い取ったことにより兄エサウの怒りを買ひ、母リベカの勧めに従って、その土地を離れ、叔父ラバンが住むハランに向け逃亡の旅に出ました。荒野を一人歩むヤコブは、自らの行為への後悔、行く先への不安と孤独の世界の中にいました。とある場所に来たとき、日が沈み、そこで一夜を過ごすことにしたヤコブは、そこにあった石を一つとって枕にして身を横たえます。その時ヤコブは夢を見ました。

「先端が天にまで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちが上ったり下ったりしている」と(創世記二八・十二)。階段と訳されている原語は、口語訳の聖書では「梯子」と訳され、教会生活の長い方は馴染みがあるかもしれませんが、語源的には、石や土を盛り重ねて造った傾斜路のイメージです。この階段が「地に向かって」伸びていたのです。



ヤコブが失意の底にあったまさにその時、天から地へ階段が下ろされ、主がヤコブの傍らに立って「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行ってもあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る」(同二八・十五)と祝福されたのです。ヤコブは眠りか

ら覚め、言います。「まことに主がこの場所におられたのに、私は知らなかった」。主が共にいて下さるとは思えない、そんな絶望の時、主が共にいて下さることをヤコブは主の言葉によって知ることができました。さらにここには天と地との結びつきが強調されています。

この創世記の箇所をテキストとした、聖歌五一九番「主よ、みもとに近づかん」は、葬送の式においてしばしば歌われます。歌いながら、私たちは逝去された方が、「み空に通う梯子」を神のみもとへと上り行く様子を思い浮かべます。この聖書の記述を読み返すし、神のもとへと至る、私たちが上りゆく階段、それは、神によって天から地へと下ろされ、神によって上ることを許された道であります。神自らが人間となりこの地に降りてこられ、私たちが救い出します。それは私たちのために、十字架を担い、死の苦しみに打ち勝たれたみ子イエス・キリストのご復活によって、私たちに与えられた神の約束であることを、ヤコブへの「わたしはあなたと共にい

る」の言葉とともに覚えたいと思えます。私は今年、イザヤ書四六章四節の「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」の聖句を大切にしています。私たちがどのような困難な時も、「彼らの苦難を常に御自分の苦難とし、御前に仕える御使いに」によって彼らを救い、愛と憐れみをもって彼らを贖い、昔から常に、彼らを負い、彼らを抱ってくださった」(イザヤ書六三・九) 神が、常に共にいて下さいます。そして、この世での生涯を終えた後も、神が備えられた階段を、神が私たちを背負い、共に天へと歩いて下さることへの信頼を確かなものにしていただきました。と思います。

春の訪れとともに、イースターを迎えました。み子イエス・キリストのご復活を心からお喜び申し上げます。



神学院での学びを終えて

聖職候補生 マルコ 福田 弘 二



私は聖公会神学院で特別聴講生として二年間学んで参りました。この間、教区の皆様には、お祈りとご支援をいただき、心から感謝申し上げます。お陰様で、去る三月九日の卒業礼拝において、佐々木校長から修了証書が授与されました。

私は定年退職してから神学校に入学し、私よりずっと若い神学生と寮で共同生活をしました。朝・昼・夕と食事を共にし、食器洗いや廊下や風呂の掃除を分担したり、進んで配膳したり食卓を拭くなど、「仕える者」の姿勢を身につけるような心がけました。

また、多くの授業を受講し、レポート提出や試験を受けたり研究発表をしたりしました。二年次は聖公会論・旧約聖書釈義・新約聖書釈義・教理学・牧会学・教会の礼拝・説教・アジャキリスト教史・ヘブライ語・教会音楽・カウンセリング・総合ゼミ等を履修しました。三年次の科目も取ったため科目数が増え、朝九時から夕方五時までずっと授業が続く曜日もあり、精神的にも体力的にもきつかった時もありました。しかし、これまで仕事を持ちながら神学塾等で学んできたことを思うと、他のことに気を取られることなく、集中して学びに没頭でき、神の心を知り、多くの気づきが与えられ、感謝の時でもありました。

朝七時半の朝の礼拝に始まり、夕方五時の夕の礼拝、夜九時の就寝前の祈りまで参加することで、日々の生活が祈り、そして神との交わりの中にあることを実感しました。二年次の教会実習は、前期は大宮聖愛教会、後期は浦和諸聖徒教会でお世話になりました。聖職・信徒、日曜学校の子どもたちに感謝します。夏期実習は、静岡の「ラルシュカナの家」という知的障がいのあるなかとアシスタントが共に暮らすコミュニティで三週間行い、小さな者の賜物を知り「共に生きる共同体」の在り方等を学びました。

そのほか十二日間の韓国特別研修では、特に「分かち合いの家」等の社会宣教活動から多くの示唆を得ました。この二年間は、私の人生において、神が私に特別にお与えくださったプレゼントのように感じています。み心ならば、ここでの学びや経験を教会での奉仕や宣教等に生かしていきたいと思えます。今後ともよろしくお願ひします。

北関東教区「信徒一致の日」合同礼拝

主題：「新たな一歩＝希望へのあゆみ」

説教：ピリポ越山健蔵司祭(東北教区)

2017年5月3日(水・休) 10:30～

場所：立教学院聖パウロ礼拝堂(立教新座キャンパスチャペル)

昨年、成立120周年を迎えた北関東教区が、新たな時へと進んでいく今年、祈りと交わりを中心とした合同礼拝のひと時を過ごします。礼拝の信施は、聖堂の改修、集会堂の建設に向けて歩みだす高崎聖オーガスチン教会のためにささげられます。どうぞ祈りをもっておささげください。

礼拝後には、教区婦人会バザー、パイプオルガンミニコンサートが催されます。

教区婦人会より

ヘレン 板橋 和子

「婦人会は 教会のお母さん役です」

タイトルは宣教師ネリー・マキム先生が常に話されていた言葉です。マキム先生は、ジョン・マキム主教とアン

ネ・マキム夫人の次女として大阪に生まれ、宣教師と幼児教育者の任務を果しながら、婦人会の在り方やその働きを身をもってお示しく下さいました。そのお考えやご生活の



一端を振り返り、教区婦人会役員をお引き受けした折にも一度婦人会の働きについて考え、その上で役目を全うし、皆様と共に次の世代に引き継いでいけたら幸いに存じます。

戦争中はフィリピンで捕虜扱いではありましたが日本語が上手なため、日本人捕虜の慰問などに努められ、戦後下館に戻られてからのこととなります。中学生の私に、将来のために婦人会に出席し学び、その働きを覚えなさいと命令が下りました。戦後の婦人会は現在のように大きな奉仕活動をする力はありませんでしたが、祈りと聖書の学びの例会が持たれていました。マキム先生は教区内の教会に出向きお話をされたり、下館と水戸や土浦、日立の婦人会がお互いに訪問しあい、合同の例会を開いて交わりを深めることを大事にされました。マキム先生が一番に心掛けていらっしやったことは、聖職を敬い、その家族をも大切に、色々な面で支えられた



ことです。聖職志願者がいれば喜んで学費やその家族にも経済的支援をされました。そのような支援は信徒や一般市民にまで及びました。このお気持ち現在の教区婦人会「牧会援助資金」に活かされているのです。そのため、ご自分の生活は清貧に甘んじたものでした。いつもピンクやクリーム色の美しい洋服をお召しなので間違えて受け止められたかもしれないが、それは幼児教育者由縁によるものです。子どもがきれいなねと感じる情操教育の一つといわれました。

折しも日本聖公会婦人会は創立一二五年を迎えます。その記念すべき時に齊藤道子会長以下埼玉伝道区の方々が日本聖公会婦人会役員を担ってくださいます。広田勝一主教様も私たち以上に婦人会を愛し、代わって歴史を掘り起こしてくださいます。このように他に誇れる幸いとお恵みをいただいているのが北関東教区婦人会なのです。この大きな恵みに感謝し、できる限り多くのメンバーの祈りと支えで神様から頂いたお母さん役を果たして参りましょう。

総会報告

北関東教区婦人会第六九回総会が二月二日大宮聖愛教会で開催されました。十時三十分より教区主教司式による聖餐式がささげられました。主教様よりお説教で「私たちの神は、私たちを担い、背負い、救い出してくださいさる神です。」

共にいてくださる神への信頼を基に、祈りと感謝を根幹にし務めを果していききたい」とのお勧めをいただきました。聖餐式の信施五〇五〇〇円は小名浜聖テモテ教会被災地支援センターに奉獻されました。役員会、教養部、文書部の報告、二〇一六年度決算、二〇一七年度予算についてすべて承認されました。特記すべきことは日聖婦感謝箱献金担当役員からパワーポイントを用いて感謝箱献金の歴史と二〇一六年度奉獻先の説明がありました。総会終了後、主教様司式の役員任命式に与りました。最後に次期役員をご紹介します。

- チャプレン 小野寺 達司 祭
- 会長 板橋 和子 (水戸)
- 副会長 鈴木 節子 (日立)
- 会計 草間 真理 (水戸)
- 後藤美智子 (下館)
- 書記 遅野井有美 (水戸)
- 宮本せつ子 (日立)

二〇一七年度聖句 北関東教区婦人会
「小さな群よ、恐るるな。あなたがたの父は、喜んで神の国をくださる。」

ルカによる福音書 十二章三十二節

連載

み言葉の礼拝④

礼拝における言葉

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」からヨハネ福音書は始められています。さらに「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」とあります。肉となつた言こそ、イエス・キリストです。神が言であることは、キリスト教信仰の根幹です。神が言であることから、神は三位一体であり、對話的存在、また神の似姿に創造された人間も對話的存在、応答する存在なのです。

日本の伝統的な宗教においての礼拝は、神主による祝詞、僧侶の読経によって成り立っています。祝詞は祈願、お経は有難い言葉ですが、参列者の応答を必ずしも求めていません。しかし教会の礼拝は、願い事も、有難い言葉も、共にわたしたちの応答を求めています。ここにキリスト教礼拝の持つ大切な側面があります。

わたしたちが言葉を発する時、わたしたちはその言葉を聞く相手を想定しています。そもそもわたしたちが言葉を覚えたのは、保護者や周囲の人びとの語りかけとおしてのことです。言葉とは、語りかける存在、聞く存在があることを前提にしているのです。

教会の礼拝(公禱)は、言葉によって成り立っています。その各々の言葉の先に相手がいるのです。近代に入り、印刷技術が発展し、誰もが書物を手にする事ができるようになり、教会でも祈り書や各人が持つ事ができるようになりました。このこと自体はすばらしいことです。しかし、書物を手にした時、人は読むことができるようになり、祈り書の言葉、礼拝の言葉も、読まれるようになってしまったと思います。礼拝の言葉は読むものではありません。唱えるもの、相手があることを意識して発せられるものなのです。

礼拝の司式者も、会衆も、自分が唱える言葉の先に、相手がいることを意識して、その言葉を唱えることは非常に大切なことです。例えば、司式者が「主は皆さんとともに」と唱える時、今ここに共に礼拝している会衆を十分に意識しているでしょうか。それとも、ただ読んでいるだけでしょうか。それは「また、あなたとともに」と応答する会衆についても同じです。

このような短い唱和であっても、それが真実で唱えられる時、そこに神が、キリストが臨在されるのです。主イエスは「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ 十八・二〇)と言われました。わたしたちはそれを礼拝の唱和の中で、現実のものにしているのです。礼拝の中で、式文の言葉を唱えることをとおして、神の臨在を感じていただきたいと思えます。

(司祭 木村 直樹)

堅信おめでとう

二〇一六年

十一月十三日

川越基督教会

パウロ 宮原 茂

アンナ ドゥエル・江美

パウロ ベーリ・ロイ・ドゥエル

パトリック 矢澤 芳男

二〇一七年

三月二十七日

熊谷聖パウロ教会

ラザロ 小林 圭介

とこしえの平和を祈りつつ

二〇一六年

十二月十九日

小山聖ミカエル教会

ガラシャ 星 光子 (89)

十二月二日

日立聖アンデレ教会

フロレンス 廣木 京子 (86)

二〇一七年

一月二日

小山聖ミカエル教会

フランシス 星 雅義 (89)

三月五日

日立聖アンデレ教会

シメオン 矢板 昷男 (82)

文書部より

今号より、新たなメンバーとして、岸本望執事、田中雅之兄(浦和)をお迎えし、新体制での働きがスタートしました。それぞれの賜物を活かして、教区の広報活動にあたっていききたいと思えます。今後とも、皆様のご協力とお支えをどうぞよろしくお願いいたします。

また、これまで部員としてご尽力いただきました平岡康弘執事、安斉勇夫兄に、この紙面にて感謝をお伝えいたしました。ありがとうございます。

(部長 司祭 斎藤 徹)